

# 着信あり、東日本大変

ゆとろ 満

## パスポート有効残存期間が不足です

「地震がありました。福島、宮城が震源地です。関東も今までにない地震です。電話を入れたほうがよいと思います」

三月十一日午後三時三十七分、親友の木藤からのメールであった。

ラブ市ブーヨンにあるダイビングショップにいた。オナーのイスラオと妻のライアンと日本でのお客獲得の宣伝方法について話し合っていた。

春木は立て続けのメールにただならぬ事態が日本で起きていることを直感した。そして、出発直前の悪い予感が現実になってしまったと思った。さらに、仙台にある実家の被害の大きさを想像し、胸が締めつけられ、顔が青ざめていくのが自分でもわかった。

春木の実家は仙台市の太白区にある。郡山というところである。地下鉄なら長町駅前から徒歩十数分、JR太子堂駅から七分ほどのところにある。一九七八年六月十二日、春木の実家も宮城県沖地震にみまわれた。倒壊こそ免れたが襖を含めた扉という扉は吹き飛び、柱はねじれ、壁は落ち、増築したところと古い建物は分離し、とても住める状態ではなかった。木藤のメールで春木はこの地震のことをとっさに思い浮かべたのである。

このとき春木は既に結婚し二児をもうけ自宅を新築したばかりの年であった。二階に行こうとして階段を上っており、強い揺れに壁に取りすがった。後の報道によれば震度4であった。

「今までないほどの揺れ」を木藤は厚木近くで感じた

続いて四十八分、「宮城の震度7から8です。携帯は関東周辺つながりません。津波がくるそうです」  
切迫した雰囲気は直に伝わってきた。

さらに五十九分、春木の娘から

「関東周辺で震度6強の地震がありました。私は大丈夫です。棚から砂糖が落ちました。お母さんは留守です。真紀」というメールが届いた。

春木はこの日、フィリピン・マクタン島（セブ島に隣のようにくっついている島。セブ国際空港がある）ラブ

いう。震源地から遠く離れた厚木でさえひどい揺れである。まして震源の福島、宮城であればその地の揺れのひどさを容易に想像できた。春木は「実家は倒壊したに違いない」と悟った。胃から苦いものが逆流してくるようであった。「やはり今回の旅行は中止すべきであった」。フィリピン・セブ旅行を帰国二日前にしての後悔であった。

旅券の購入は「イーツアー」に依頼してあった。出発予定は、成田国際空港二月二十八日午後二時二十五分、帰国はセブ国際空港三月十三日午前八時出発であった。往復共にフィリピン航空であった。二月九日にチケット代六万九千九十円を振り込んだ。いつもならもう少し早く送られて来ているはずのeチケットをインターネットで手にしたのは三月二十二日であった。そこには「ご出発間近なお客様へ『旅の準備』のご案内」が添付されていた。そして「パスポートの有効残存期間は大丈夫ですか？」という注意書きがあった。春木のパスポートの期限は八月であることは知っていた。六ヶ月の残存期間があり、ぎりぎり間に合うと思っていた。注意書きには（例）としていくつかの国の有効残存期間が例示されていた。フィリピンも掲載されていた。そこに「六ヶ月ブ

ラス滞在日数」とあった。それを読んで春木は愕然となつてしまった。慌ててパスポートを調べると半月余り残存日数が足りないことがはっきりした。頭が真っ白になつたまま取り急ぎ厚木のパスポートセンターに電話をかけた。電話は厚木ではなく、横浜のパスポートセンターに回された。そこで事情を話し「なんとか二十七日の出発までに再発行していただけないか」と頼んでみた。係員は「それなら直接厚木パスポートセンターに話してみてください」と言つて電話を厚木に回してくれた。

厚木の職員の対応は丁寧であつた。切羽詰つた状況にある春木には、とてもありがたかつた。二十二日中に手続きを完了すれば三月一日に新しいパスポートを再発行できるという。しかし、それでは二十八日出発のチケットが無駄になってしまう。今回は友人の播磨が同行することになつてゐた。播磨は、昨年十月にスキューバダイビングのライセンス取得のためセブ島を訪れて以来、二度目のセブ行きである。播磨一人では心もとないところがある。一日にバスポートの更新手続きが終えたとしてもそれ以降にチケットが入手できるかどうかは不確かである。もし入手できなければ、播磨が一人で行動しなければならぬ。特に今回は春木の住む市内の小学校五年

生が集めた文房具類を交流しているオランゴ島スバ小学校へ贈呈することになっている。英語の会話が十分でない播磨には荷が重過ぎる。そんな事情もあり、なんとしても二十七日までにパスポートの更新手続きを済まさなければならぬ。春木にとり二十六日が土曜日でパスポートセンターが休みであることも痛かつた。

係員は山口と名乗つた。彼は事情を聞いて「旅券緊急発給・早期発給願ひ」という制度があることを教えてくれた。しかし、それには厳しい条件がついていてということである。それは当然なことであると春木には理解ができた。まず緊急、不測の事態によること。私的な事情はゆるされないこと。公的な理由、目的があるということ。渡航者が申請者本人でなければならぬこと。前もって旅券の申請ができなかつた理由が納得できるものであること。などが必要であつた。これらのことを文書で願ひ出る、ということであつた。

山口は電話で春木の方の事情を聞いてくれた。春木が代表の「教育ボランティア協会」の活動の一環としてスバ小学校との交流と支援を行うということに理解を示してくれたのかもしれない。「発給願ひの用紙を送るのでそれに記入して返送して」と好意的な返答をくれた。こ

のやりとりが終えたのが十二時半頃であつた。幸い住民票の提出は必要なかつた。但しパスポート用の写真一枚が必要であつた。念のために正式書類の提出締切時刻を尋ねると、午後四時半であつた。春木は大急ぎで近くの証明写真撮影のスタンドに向かつた。

「旅券緊急発給・早期発給願ひ」の書類には六つの記入項目があつた。その中で最も苦勞したのは「理由」であつた。春木は十年近く交流と支援を行っているスバ小学校が三月には夏休みに入る（実際は四月からというのが後に判明）ため二十八日にはどうしても出発しなければならぬこと。また、同行の播磨は今回初めての訪問で、しかも英語の会話が十分でないため意思疎通がうまく行えない。したがつて春木本人が行かないことには目的が果たせないことを強調した。時間に追われての文書作成であつた。二時ごろには文書を作り上げファックスで送信することができた。電話で送信した旨を伝えた。しばらくして山口から電話があつた。「上司に文書を上げるので現地での日程表、協会の規約、現地スタッフとのやり取りを証明する文書を送ってくれ」ということであつた。春木は大急ぎで日程表を作り、現地スタッフの役員名、これまでもらつた札状などを用意して送付した。

三時過ぎ、山口から「正式な書類を持ってセンターに来所して」という電話があつた。春木は希望が八割方実現したと思つた。しかし、早合点は禁物である。持参する書類を三重にも点検して小田急線の相模原駅に急いだ。パスポートセンターへの直近の駅は本厚木駅である。

相模原駅から本厚木駅までは各駅停車の電車で十八分そこらで着いてしまう。三時二十九分の電車に乗り込んで椅子に座つた途端、春木の口からフーという吐息が音を立ててもれた。春木は目をつぶり息を整えた。パスポートセンターに着いたのは四時少し過ぎであつた。

受付で事情を話すと「少しお待ちください。担当に伝えますから」と女性の職員が答えた。センターには平日にもかかわらず約二十人近くのお客がいた。文字通り少し待つと呼び出しがあつた。カウンターにいくと華奢な感じの男性が「お待たせしました。春木さんですね。書類をお見せください」と抑揚のない口調で春木に伝えた。胸に「山口」と記されたネームプレートをつけていた。

春木は緊張のため固い口調で「よろしくお願ひします」と言いながら持参した書類を山口に渡した。山口は書類を確認すると「上司の決済をもらいますのでお待ちください」と言つて別室に向かつた。「決済」という言葉を

春木は聞き逃さなかった。これでパスポートは更新されると確信した。待ったのは十分間ほどであったろうか。春木には長く感じられた。春木は再び呼び出された。そして「新しいパスポートは二十五日九時以降から受領可能です」と伝えられた。急に肩の力が抜けてしまった。余りにあっけなく思えた。しかし、喜びがこみ上げてきた。

二十五日勇んでパスポートセンターに向かった。

「それではこれが新しいパスポートです。漢字氏名、ローマ字名、生年月日などの間違いがないかも一度確認してください」

山口が淡々と春木に伝えた。

春木は愛おしむようにして手のひらでパスポートをなでながらパスポートをめくった。もちろん間違いはなかった。

「それでは古いパスポートに針目を入れます。後は自分で処分してください結構です」

春木は山口の声を聞きながらこれで全てが終わったと、安堵の気持ちになった。同時に春木自身もたらしめた手違いが旅にどのような結末をもたらすのか不安な気持ちも湧いてきた。

### 大地震の着信あり

マクタンの天候は異常であった。三月と言えば、例年なら雨季が明け連日暑い日が続く。しかし、今年はまだ日本の梅雨時のように雨やじめじめとした曇りの日が続いてきた。気温が三十度を超える日はまれであった。この日の朝は久しぶりに南国特有の刺すような日差しが降り注いでいた。播磨と一緒にショップを訪れるとオーナーの次男のデイノが忙しそうに立ち働いていた。年配の日本人夫婦とその友人らしき男性たちのダイビングの準備をしていた。前日デイノからその話は聞いていた。体験ダイビングということであった。場合によっては、春木も手伝うことになっていた。しかし、それは無用だった。四人のうち体験ダイビングをするのは二人きりであった。したがってデイノ一人で十分対応できた。春木と播磨は四人に挨拶をしてオーナーのイスラオが待つ二階に上がった。時計は十時を過ぎていた。イスラオは、通称バンカーポートと呼ばれているダイビング用のボートを八隻所有している。そのボートは自分の店にくる客用にも使用するが他のダイビングショップなどにレンタ

ルもしている。妻のライアンはダイビングショップの経営に携わっている。なかなかのやり手である。イスラオは数年前から糖尿病を患っていて、それが少しずつ進行している。現在、歩行は足をすってそろそろと歩くような状態である。しかし、ダイビングの技術は抜きんである。また、エアガンでの魚のハンティングの腕は名人級である。訪問する予定のスバ小学校は彼の生地にある学校である。

イスラオとライアン、そして播磨を交えて話をしているうちにわかにかに灰色の雲が南の空を覆い、しかも風まで吹き出してきた。二階から一望できる海面がざわめき白波が吹き上がっている。スコールまがいの雨が風とともに押し寄せてくるのはつきりと見えた。あつという間に雨が降り出してきた。春木たちが居るところは半分ほどテラスになっている。雨を防ぎようがない。春木と播磨は、ショップから車で七分ぐらいのところにある木藤の家にもうここにした。

木藤の別荘に着くと、管理人のルービーが小さく微笑んで二人を迎えた。ルービーはゴーギャンのタヒチの絵に出てくる女性たちによく似ている。皮膚はチョコレート色、髪は漆黑、瞳も黒。皮膚や髪がダーク調なので白目

がひどく目立つ。年齢は四十歳には届いていないと思うのだが五十歳ぐらいに見える。十五歳の息子と十二歳の娘がいる。料理は上手ではない。春木たちはこの別荘に居る間、朝食を除いてすべて外食だった。朝食はパンとジュースで済ませた。

午後の予定がなくなった二人は、雨降りでもあるのであさつてに迫った帰国の準備に充てることにした。そして、夕食はルービー家族を招待することを伝えた。母親からそのことを聞いた子どもたちも大喜びだった。荷造りが一段落して一階のリビングのソファで休んでいた。春木の携帯電話にメールの着信音が鳴った。

### 東日本大震災の着信あり

「マグニチュード8・4です。水道管があちらこちらで破裂してます」

「今、病院の帰りですが、高速は止まっています。そのため一般道に車が渋滞です。道路は川のようにです」十六時十分。

親友の木藤からだだった。彼の母親は認知症なのだ。他の合併症があり、しばらく伊勢原にある東海大学付属病

院に入院していた。その後退院したのだが、一週間に一度の回数で通院をしているのである。木藤はその病院からの帰途だった。春木も返信をした。しかし、春木が打ち込む字数は少しずつ限定されるようになってきた。「こちらは大丈夫です。まだ揺れてます」木藤からはすぐに返信がきた。

震源地が宮城県沖と知った春木は、彼の仙台の実家にもこの間、何回も電話をかけた。そのうち数回呼び出し音になったのだが、妹は電話口にはでなかった。そのうち呼び出し音はならず、通話不能の音声が流れてくるだけであった。

三十三年前の宮城県沖地震でも同じようなことが起こった。その頃は、両親とも健在であった。母の話では強い地震を感じてすぐに立っていることはできず、その場にへたり込んでしまったという。少し揺れが収まった瞬間に外に飛び出した。無我夢中で何がどうなってしまうているのも分からなかったという。後で家の中の惨憺たる有り様をみて命が助かったことが不思議なくらいだったと、しみじみと述懐していた。飼ひ猫は一週間ほど戻ってこなかったという。猫にとっても相当の恐怖であったのだろう。

ようやく通話が可能になったのは震災後三日目であった。今回の地震は相当大きいと思われるので、電話の回復はもつと日数がかかるだろうと推測された。しかし、前回と違うのは携帯電話があることだ。しかも、メールという手段もある。なんとかこれを生かして連絡を取ろうと春木は考えた。また、相模原の春木の自宅が無事であったことに安堵した。

「今、伊豆に着きました。宮城県で震度8・3の大地震があり、津波などの大きな被害が出ています。電話は全く通じない状態です」

妻からのメールであった。妻は陶芸家である。南伊豆町の別荘に窯を持っている。近くの「道の駅」の町立の建物の一角に展示即売の店を設けている。毎月一週間ほど伊豆に滞在している。陶芸の制作と販売に励んでいるのである。今回、折悪しく東北の地震と重なってしまったのである。また、別荘のあるところはテレビや携帯電話が届きにくい電波受信困難地域である。妻との通信は難しくなるだろうと春木は直感した。

「地震大丈夫ですか」

鹿児島島の尚子からであった。尚子とはダイビング仲間である。グアムでたまたま一緒にになり、それ以来都合が

痴呆で寝たきりの母を抱えている妹はそう簡単に避難はできないはずである。母をかばって二人とも圧死しているのだろうか、それとも身動きができない状態にいるのであろうか。実家の二人のことを思うといっても立ってもいられなくなる春木であった。そして、海外旅行していることにも自責の念に駆られるのであった。なんとか安否を確認したい。何か方法があるのでないかと春木は思案を巡らした。二月二十七日にJR南武線登戸近辺から宮城県の南部にある大河原町に転居した姪の恵美のことを思い出した。恵美は春木の二番目の妹、京子の娘である。春木の娘の真紀は恵美とメールの交換をしているので実家の情報を入手しているかもしれない。春木は早速娘の真紀にメールを入れた。真紀は春木の家と道路を挟んだ真向かいのアパートに住んでいる。このとき春木の妻は伊豆の別荘に行っていて留守であった。自宅の状態が心配な春木は、娘に家の様子も確認するように依頼した。

「宮城県、通話規制中でつながらず。実家はとりあえず大丈夫。成田空港は現在、閉鎖だそうです」

娘からの返信であった。三十三年前の宮城県沖地震でもそうであったが、電話はなかなかつながらなかった。

つくと一緒に潜っていた。「ただいまセブ。自宅は無事、仙台の実家とは連絡取れず」と春木は返信した。春木の携帯からのメールの字数はますます制限されてきていた。春木たちは二日後の十三日に帰国であった。問題は飛行機が飛ぶかどうかということである。

「成田空港は現在、閉鎖だそうです」

娘の真紀からの返信であった。大地震当日であるから空港の閉鎖は当然である。問題は一日おいての十三日に飛ぶかということである。もし十一日のフライトがないとすれば、フィリピンでは何かと手続きが面倒になることは自明である。同行の播磨もそれを心配している。今回、播磨はJALのマイレージを利用して来ている。成田とマニラ間である。マニラとセブ間はフィリピン航空の国内線を利用している。春木は成田とセブ間の直行便である。もし、十三日のフライトがないとすれば、フィリピン航空を取り扱っている旅行会社に行き、フライト日付変更の手続きをしなければならぬと、播磨は説明してくれた。春木はそうならないことを祈った。

テレビをつけっぱなしにしている。マクタンの木藤の家テレビは衛星放送が受信できない。したがって、放映されているのは四つの国内放送だけである。フィリッピ

ンの共通語タガログ語が大部分である。英語の放映もあるがほとんど娯楽番組のみである。ニュースがないかと目を凝らしているのだが午後五時過ぎの段階ではまだ放映されていなかった。

「まだ地震が続いています。今、また岩手でありました。津波は太平洋沿岸全般に行くそうです。フィリピンも行くそうです。仙台も心配ですね」。十七時五十分、木藤からだった。

「俺と姉は大丈夫。母は未確認です。仙台は結構大変な状況です」。長男の真一からだった。春木は「母親は無事に伊豆に到着」したことを記して返信をした。十八時三十二分であった。日本とフィリピンの時差は一時間である。日本が一時間遅い。

フィリピン時間の十八時ニュースの時間であった。播磨にも奥さんから逐次メールで状況が報告されていた。彼の故郷は福島県の白河である。彼の自宅は被害がなかったが、故郷の家については春木同様に全く情報が入っていないかった。

ニュースが始まるといきなり津波の映像が映しだされた。それは信じられないような光景であった。巨大な激流が家や車を押し出している。それらはまるでカヌーの

ように上下しながら恐ろしい速さで流されていく。そのうちいくつかの家はまるで破砕機で砕かれたようにバラバラになったかと思うと、あつという間に波に飲み込まれていく。「アー、アー」という人の声が画面から流れてくる。その映像の場所も時間も分からない。ただ大きな漁船らしきものが波にもまれながら流されていることからどこかの港町らしいことは想像できた。

「これは本当に大変なことが起きている」

春木と播磨は顔を見合わせ、互いに絞り出すような声で言った。互いのメールに届いた大地震や津波などの情報は二人とも共有していた。しかし、映像は二人の想像をはるかに超えていた。

「十三日帰れるかね」

「危ないね」

春木の問いに播磨は低い声で答えた。

「春木さん、ディノの妹が旅行会社勤めているというから、妹に確認してみたらどうかね」

「それはいい案だね」

私はディノに電話をかけた。ディノは「今日の便は飛んでいたから大丈夫だよ。明日妹に聞いてみる」と返事をしてきた。フィリピン人は概してみな楽天的である。

ディノも例にはもれない。どんなことでも「モンダイナイ」である。しかし、今回は別である。緊急事態が発生している。それに滞りも終わりの方とあって手持ちの金も日本円一万円と一万ペソ（日本円にして二万円ほど）しかなかった。これは播磨にしても似たような状況であった。もし万一、再度航空券を購入する羽目になったら誰かに借金をせざるを得なくなる。問題は成田空港が使用できるかにかかっていた。

娘の真紀からのメールが入ってきた。

「仙台の家、電話呼び出し音のみ、避難していると思われます。恵美ちゃんからメールあり、仙台実家のこととはわからず、とのこと」

「仙台空港が津波被害がひどいらしいです。関東から青森まで電車が止まっています。東京とか横浜には帰れない人が何万人もいるそうです」

木藤からのメールは来るたびに地震の被害が深刻で、拡大もしていた。首都圏もその被害を免れないとすると成田空港の機能も働いていないに違いない。明後日の成田行きフライトがますます遠のいて行くように春木には思われ、慄きが背筋を走っていくのを感じた。被害の拡大が首都圏にも及ぶとなると、春木にはもう一つの懸

念すべきことがあった。それは五月二十八日に開催することになっているピアノコンサートのことであった。春木は短大の講師を務める傍らボランティア団体を立ち上げ教育相談活動や音楽の普及活動も行っている。音楽活動は若手の演奏家を中心に年二回ほど無料で演奏会を行っている。五月は、春木の活動を理解してくれた橘かおりが演奏してくれることになっている。橘はテレビでも度々紹介されている韓国人のテナー歌手の専属伴奏を務めている。力強くも繊細で情感たっぷりの演奏をする。春木は聴くたびに彼女の演奏に魅入られいつか彼女の演奏会を開きたいと考えていた。一年前の演奏会終了後、会場入り口で来場者を見送っていた橘とうまい具合に話をする機会を得た。ほんの数分のことであったが名刺を渡し、連絡のアイコントを取りつけることができたのだ。その後何回かの交渉の後、橘は格安で出演を承諾してくれたのだった。彼女は土浦に住んでいた。地震の被害がどれほどのものなのか春木は急に心配になった。「実は北海道に出かけるつもりで常磐線に乗っているところでした。たまたま停車中だったので大丈夫でした。それより宮城は大変なことになっているようですよ！こちらの交通網も全部止まっているので、帰るに帰れず

困っています。とにかく情報が入ってこないので不安です」

地震発生時、電車が停車中であつたことは幸いなことであつたと春木は思った。しかし、地震後電気は通つていたのであろうか。おそらく停電しているものと思われ。暖房のない電車を時間が経つごとに冷えを増しているに違いない。しかし、北海道旅行であるならば防寒着を用意しているはずである。ただ懸念されるのは、五歳になる娘が一緒であることである。翌日八時六分に再度メールがあつた。

「昨日は結局電車が動かず、我孫子駅近くの公共施設で一泊しました。まだ我孫子から北は電車が動いていません。いつのことになるやら・・・。同じマンションの人によると、食器戸棚から食器が落ちて割れた家もあるということです。自宅へ帰ったら片付けに追われゆつくりできないかも知れません。ご実家は無事でしたか。お母様もご無事でいらつしやるように！成田だか羽田だか（すみません、こちらも情報不足です。）空港が一、二階冠水して孤立しているとか。気をつけてお帰り下さい」

その後判明したのだが、橘の自宅そのものの被害はないうちも五年以上も介護と看病とを続けている。それはまさに完璧と言つていいほどの手厚いものである。いつも母は清潔な寝具にくるまれ、体も常に清潔に保たれていた。認知症の母は、一分もしないうちに同じことを何度も尋ね、ねだつてくる。「ごはん」「水」「かゆい」などと。そのたびに裕子は厭わずに対応している。母の介護の前は父の看病で会つた。父は十七年前に他界している。死因は食道癌であつた。亡くなる前二年間ほど入院、加療をした。その時も父の看病を献身的に行った。結局、婚期を逃し、今に至っている。春木は妹には感謝の言葉しかかなかつた。

母は月に二回ほど若林区にある「杜の里」という施設にショートステイをしている。たいがい二泊三日の予定である。仙台平野の一角に、田園の広がるただ中にある施設である。三階建てで、各部屋も廊下もゆつたりとした空間を取り、いつも清潔に保たれている。しかし、環境の良い分、公共交通手段は極端に悪く、訪ねるのには自家用車かタクシーしかその手段はなかつた。春木は、母の安否が確認が取れずとも、この施設にステイ中ならば安心であると思つた。むしろ自宅にいるよりも幸いであつたと思つた。最も心配であつた二人の無事がほぼ確

かつたのだが、食器類や部屋の置物が落ちて床に散乱したり、商売道具のピアノの足が曲がってしまったそうである。その様子は春木にはよく想像できた。三十三年前の宮城県沖地震で実家が屋内はまさに惨憺たる有様で、足の踏み場もない状況だつたことを知っているからである。その地震後、元氣だつた母は「高価な瀬戸物なんかいらぬねえ。形あるものは壊れるというが本当のことだ」としみじみと言つたのを昨日のように春木は覚えていた。壊れても元に戻るのには幸いである。しかし、破壊され、流され、灰になつたものは元に戻らない。特に命が失われた場合の悲しみは計り知れない。一体この地震と津波で何千、何万人の命が失われているのだろうか。その中に母や妹たちが含まれていないという確証は何もないのである。春木の目の前の分厚いテレビに津波の光景が再び映し出された。

「恵美ちゃんから恵美ちゃんのお父さん経由で裕子さんは無事」。娘からであつた。間を置かずには再び娘の真紀からメールが入つた。

「おばあちゃんもはショートステイ中で確認取れず」

春木はほっと胸を撫で下ろした。何よりも妹の裕子が無事であつたことが嬉しかつた。裕子は寝たきりの母を

認出来て春木は胸を撫で下ろした。二十二時三十八分のことであつた。

「仙台で三百人の遺体が発見されたらしいです。ではまた」

木藤からであつた。木藤はまだ車の中なのだろうか。

渋滞に巻き込まれカーラジオかテレビを見ているのだろうか。まめに連絡してくれる友人に春木は改めて強い友情を感じた。

「太白区は長町中学校にかなり避難している模様。たぶん裕子叔母さんもここに避難していると思われませう」

娘の真紀からであつた。長町中は春木の母校である。

実家からは徒歩で十分ほどかかる。実家の目と鼻の先には小学校がある。避難するなら小学校であろうと春木は思つた。しかし、現地ではどのような事情があるか分からない。もしかしたら遠く離れた中学校へあえて避難をしているのかもしれない。日が変わり午前二時になつていた。春木はベッドに横になつていた。もちろん眠れるはずもない。クローラーを切つた暑苦しい部屋で春木は自分の体をもてあましていた。眠気は全くなく、頭は冴え渡りさまだまのことが頭をよぎつた。しかし、実家の二人の安全がほぼ確認された状況では、春木の最大の懸

念は十三日のフライトが確保されるか、ということに最後は帰着するのだった。すでにフィリピン時間では午前一時であった。

「仙台も実家も無事で何よりです。にーちゃんは大丈夫なの」。福井に住む次男からだった。春木の出したメールへの返信であった。福井にいる息子の携帯もなかなか繋がらない状況であるという。現代社会は居食住、交通、通信手段などあらゆるものが密接に繋がりが、その一部が遮断、あるいは破壊されると全てが機能停止してしまうことを春木は実感した。高度に発展した現代社会の脆さなのだろう。

いつの間にか寝てしまったようだった。メールの着信音に春木は目を覚まされた。窓のカーテンの間から洩れて来る光が白い。今日は久しぶりに熱帯の日差しを浴びることができそうだった。メールは娘の真紀からだった。「ひっきりなしに地震警報が出るので私は完璧して起きてました。恵美ちゃん一家は転居したばかりのアパート部屋ではなく、車の中で一夜を過ごすともメールがありました。成田、羽田空港とも百便以上欠航です。しかし、横田基地で少し飛行機の受け入れがあるようです。仙台空港は津波が押し寄せ、空港内に乗客、職員が千人ぐら

いおるそうです。今回の地震は世界で五番目に大きいとの事。フィリピンにも津波が行ったようです。宮城全域が停電中です」

春木は、成田空港のフライト便、特にフィリピン空港の発着の状況を調べられないか、と依頼の返信をした。「お父さんの乗る航空会社名と便名を知らせて下さい。直接フィリピン航空のホームページ検索してみます」

今回のことでは真紀が春木にとってキースティションの役割存在である。それにしても携帯といい、インターネットといい情報手段の進歩と利便さを春木は改めて実感した。日本時間八時二十七分、フィリピン時間ではその一時間前である。

### セブのモール

十二日はセブ市の中心部にあるモールに買い物と食事に行く予定である。メイドのルービーとその息子のジャングル、娘のララミー、さらにデイノの娘たち二人も同行する事になっている。これはこの地への旅行最終日の恒例行事でもあった。特にルービー親子はとても楽しみにしている。ジャングルはハイスクールの二年生（日本

でいうと中学二年生）、ララミーは小学五年生である。

本来ならば六年生なのだが二年前にデング熱に罹り、九死に一生を得た。そのため一年休学したのであった。ルービー親子たちは二年前に木藤の別荘に来た。それまではセブ島の北端にある小さな島マラパスクアに住んでいた。そして、木藤がその島に建築中のリゾートの管理をしていた。ところが、木藤のマクタンの別荘を管理していたベティが不慮の事故で亡くなったためにその後任としてきたのである。春木がルービー親子と会ったのは一年前であった。多くのフィリピン人の子どもがそうであるようにジャングルもララミーも恥ずかしがってなかなか近寄ってこなかった。しかし、いったん話をしだすと満面に笑みを浮かべて親愛の情を示してくる。兄のジャングルはスポーツ好きの少年で愛嬌のある子だった。妹のララミーは割り箸のような体で背も百四十センチぐらいで、とても十一歳には見えなかった。しかし、英語はとても上手に話す。春木は自分の英会話の勉強も兼ねて彼女に親しく話しかけた。

ララミーの話によると、父親は大工であるが、二年半ほど前にバイク同士で衝突をして右足を複雑骨折をしてしまったという。それ以来、歩行が難しくなり、仕事も

十分にできなくなったというのである。将来何になりたいの、と質問をした。

「先生になりたいの」

「小学校の先生」

「ハイスクールの英語の先生」

「それはすばらしい目標だね。ララミーの英語はとても上手だから、きっと立派な英語の先生になれるね」

春木の言葉にララミーはにっこりとして、

「サンキュー」と答えた。黒く大きな瞳がきらきらと輝いていた。

春木は、まだ幼く見えるララミーがしっかりとした目標を抱えていることに正直感動をした。彼女に何か援助ができたらいいなと思った。

「何かほしいものがある」

春木は一緒に食事をした帰りにでも、洋服か学用品でも買ってやろうかと思った。

少し間をおいて、

「仕事がほしいの」

ララミーは春木の顔をまっすぐみて答えた。

春木は虚を突かれた。全く予想だにできなかった答えである。しかし、彼女の境遇をよくよく考えたならば十分

にあり得ることであつた。そう考へても熱いものがこみあげてくるのを春木は感じた。日本の同年齢の子もたち百人に同じ問いをしても彼女のような返答はまずない。こんなことがあつて、春木はマクタンの木藤の家に滞在したときには、この一家を一度は食事に連れて行き、子どもたちに好きなものをプレゼントすることにしたのである。しかし、子どもたちは決して高いものをねだることはしなかつた。彼らのつましやかさの表れであり、春木への配慮でもあつた。

木藤の別荘は、マクタン島の南側、海岸に近いラブラプ市のブーヨンというところにある。近年、南の海岸には多くのホテルが立ち並び、観光客を対象にしたレストランや海鮮料理店などが数多くある。最近では韓国人のツーリストが増加するにともない、韓国料理店・焼肉店も多くなつてゐる。もちろん、日本料理店やラーメン屋なども多い。

春木がララミーたちを連れて行くモートルはSMというセブ市の郊外にある。高速船などが発着する港に近い。広大な駐車場がある。建物は4階建てだが概観からは5、6階に見える。内部にはそれぞれ東西と南北を突き抜ける広い通路がある。東西の通路は吹き抜けとなつてい

それぞれ階にはエスカレーターが設置されている。一階は食料品を扱うスーパーマーケットである。果物と魚の種類が数多くあり、見ているだけでも十分に楽しめる。二、三階は専門店街、衣料品などを扱うスーパー、そして飲食店がある。いずれも品数が多く、いつ行つてもお客で溢れかえつてゐる。

この日、ララミーが欲しかつたのはサンダルであつた。前回洋服をプレゼントしたのだが、それに合う靴は「次ね」と言つてあつた。ララミーはそのことをしつかり覚えていたのである。母親と一緒に探したのだがなかなか気に入つたものがなく、時間がかかつた。ようやく気に入つたサンダルは千二百ペソ、日本円で二千四百円ほどだつた。ララミーは遠慮深げに春木の顔を見上げ、黒い瞳を見開いて「いいですか」と尋ねた。春木はにっこりと笑顔をつくり、キャッシュコーナーを指差した。ララミーは「ありがとう」といつて春木に抱きついてきた。

ジャスマンの買い物は簡単であつた。「買い物にいう」といわれたときから決めていたようだつた。バスケットボール用のランニングシャツである。日本円で八百円ほどであつた。買い物有一段落した後、ジョリビーというファーストフード店で昼食を摂つた。昼食時とい

こともあつてかここもほぼ満席に近い状態であつた。鳥の唐揚げ、ポテトフライ、ライス、スパゲッティ、ピザ、コークなど十人前で四千円ほどであつた。フィリピンの子どもたちも例に漏れずこのようなファーストフード店が大好きなのだ。ララミーたちは目を輝かせながらこれらの食べ物をおぼつてゐた。満席のお客たちの多くは家族連れか若者たちであつた。皆楽しげにしている。日々繰り返される光景に違ひない。実は、この繰り返される日常こそが一番の幸せなのである。残念ながら人はこのことを災難などに直視して初めて知るのである。

「今日は一便欠航で、もう一便は未定です。随時調べます」

娘の真紀は、専業主婦であるので時間もあまり実にごまめに連絡をしてくれる。また、他人に気楽には頼めないことでも肉親ゆえ、また娘ゆえに遠慮なく依頼できる。春木は今更ながらに娘の存在に感謝した。

食事を終えて通路に出た。大きく壁面を占有しているガラス越しに外を見ると青空は一変して灰色の雲が空一面に空を覆つてゐた。例年だと雨季が終わつてゐるのにどうも天候がおかしい。それ言うとデイノも頷いた。駐車場に行こうと外に出ると小雨がぱらつてゐた。気温

までが下がつてゐるようであつた。車に乗り込むと子どもたちはにぎやかにしゃべりだした。それに引き換え大人たちはみな口数が少ない。人ごみの中を買い物したり食事をしたりでかなり歩いたこともあつて疲れてしまつたのだらう。春木も疲労を感じてゐた。次第にまぶたが重くなつてくる。車内の冷房がかなりきつい。手を伸ばしてエアコンのダイヤルを低にした。ふと気がつくともちもちはすっかり寝入つてしまつてゐた。やはり子どもたちも疲れてしまつてゐたのだ。そのとき春木の携帯の着信音が鳴つた。開くと記憶にないナンバーが記されてゐた。番号の頭に十印がついてゐるので外国からである。

「ハロー」と言うと早口の英語の音声は春木の耳に響いた。

電波が遠いのか音声は明瞭でない。しかも音が遠くつたり低くなつたりですます理解しづらい。その上、春木はそれほど英語がうまくない。

「どなた」

「ペリー」

かすかに聞き取れる。

「どこから」



「カンボジア」

「津波は大丈夫」

春木は初めて見舞いの電話であることが理解できた。確かに十年前ほど前に、カンボジアのプノンペンに四日ほど滞在した。しかし、ペリーという名前に覚えがなかった。よく聞き取れないこともあり、春木はとりあえずお札を言つて折り返し電話をすることを伝えて切つた。着信番号をデイノに見せると確かにカンボジアの国番号であった。

春木は十年前のカンボジア旅行のことにゆつくりと思いを巡らした。

カンボジアの首都プノンペンを訪れる契機は、友人の木藤の勧めであった。アメリカ映画『キリング・フィルド』をみた木藤はその悲惨さに戦慄した。とても人間の所業とは思えなかった。アウシュビッツにも匹敵するものと思えた。一九七〇年代末期、ポル・ポト政権は文化人を始めとした多くの国民を虐殺し、大穴を掘つてそこに埋めた。この時代のカンボジアを取材したニューヨークタイムズ記者とその助手たちの過酷な体験談話を映画化したものが『キリング・フィルド』である。春木もその映画のDVDを借りて鑑賞した。そして、どうしてもか

の地を訪れたいと思った。

二人がプノンペンの空港降り立ったのは二〇〇一年の三月であった、それは春木の目からは地方の小さな空港としか言いようがないほど小規模のものであった。一国の首都の国際空港のあまりの小ささから推測してもカンボジアの経済的遅れは容易に推測ができた。それはとりもなおさず、一九七〇年代から続いた内戦の痛手からなお復興していないことの証でもあった。国の指導者を誤れば国をも失いかねない。国民はよくよく吟味して政治家を選出しなければならぬと、このとき春木は強く心に思った。

プノンペンで宿泊した翌日から世話になったのがバイクタクシーのロットである。滞在の三日間春木は彼のバイクで観光めぐりやチュンエクのキリングフィルドにも訪れた。首都プノンペンからチェンエクまでは十四、五キロぐらいいであつたらうか。当時、市内をでると道はほとんど舗装されてなくて穴だらけの道であつた。タクシーはスピードを出して走るとは到底無理であつた。雨水の溜まった穴を避けたり、避けきれずに穴を走らなければならぬこともある。それに比べてバイクは器用に穴を避けて走ることができる。その分ジグザグに走る

ことが多い。結局、バイクの方がずっと早く目的地に着くことができる。その上、料金はタクシーの半額ほどで安上がりであつた。さらに、運転手のロットは英語が話せた。これで春木も木藤も助かつた。ポルポト政権時代、フランス語、英語などを話す者はことごとく処刑されてしまつていた。したがつて、当時のプノンペンでは英語が話せるドライバーは貴重であつた。ロットは私たちに実によく世話をしてくれた。友情さえ生まれたといつてもよいかもしれない。もちろんそれは春木たちと一方的な思い込みであつたかもしれないのだが。

滞在最後の夜、春木と木藤はロットたちの家族をレストランに招待した。そのとき同居している叔母のペリーもロットと一緒に来た。ペリーは春木とは十歳ほどの違いで四十代半ばであつたが、十歳ほどふけて見えた。苦労がそうさせたのだらうと春木は推測した。ペリーは少し英語が話せた。あまりうまく英語の話せない春木にはいい相手だつた。さらにペリーの明るい性格が不十分な話をカバーするに十分で、愉快なディナーになつた。春木にとつても日本出発以来の家族的な食事を楽しんだのだつた。ペリーはそのときのことを未だに忘れずに見舞いの電話をくれたのである。春木はようやくそのこと

に思い至つたのである。「人の心はありがたい。本当にありがたい」

春木は胸にこみ上げるものを感じた。

マクタンの木藤の別荘に着くとすぐに木藤からメールが届いた。

「福島第一原発が爆発しました」

「今、福島第一原発から半径二十キロ圏内の住民は緊急に避難するように警報が入りました」

木藤の原発が爆発したというメールに春木は血が引く思いがした。木藤のメールでは原発としかない。原発そのものが爆発したのか、または原子炉周辺が爆発したのか定かではない。しかし、二十キロ圏内の住民を避難させるという指示がなされたとするなら尋常なことではない。春木はとつさにチェルノブイリの原子炉爆発のことを思い浮かべた。炉心溶融を起こし、放射能汚染がヨーロッパにまで及んだことを。福島から仙台までは二百キロに満たない。放射能物質が風で飛ばされてくることは容易に想像される。また、福島県全体が汚染されたなら列車や自動車も通行が不可能になつてしまうこともあり得る。そうなれば、東北地方は本州から分断されてしまう。想像もし得ないことが進行しているのではないかと春木

は空恐ろしくなるのだった。

テレビで津波の映像が流れた。漁船が何艘も流されていた。大きな波に飲み込まれてバラバラになっている小さな船、大きな漁船が橋げたに衝突し、それでもかろうじて沈没もせず流れてる、あるいは防波堤を乗り越えられずに濁流に飲み込まれている。春木はその映像を固唾を呑んで見守っていた。播磨も無口のままじつと画面を見続けていた。これは船の沈没ではなく日本沈没の予兆ではないかと春木は寒気を覚えた。こんな状況で本当に飛行機は飛ぶのか再び春木は不安に駆られた。播磨にしても同様であった。播磨には彼の妻から果敢なくメールが入っていた。春木と似たような内容であった。それでも二人はメールが入るたびにお互いに知らせあった。

「仙台は相変わらず電話が繋がりません。仙台対策本部の知らせによると太白区は長町小学校に現在二千人避難しているとのこと。裕子おばさんもここに避難していると思います。他にも表になってどこに何人避難しているかの状況が記載されました。おばあちゃんのショートステイ先の名前や住所分かりますか。分かればこちらで調べてみます」

娘の問いには春木は答えられなかった。母のショート妻のおしゃべりに少しばかり閉口していた春木は気楽に答えた。

「枝野長官会見です。『格納容器爆発ではなく、放射能漏れは一切なし、爆発は地震による建物の壁が破損した』とのことです」

「藤木と真紀のメールでは福島原発の爆発の様子が微妙に違っていた。混乱の中では同じ内容の画面、話を聞いても理解の差はどうしても出てくる。これは仕方がないことである。いずれにしても福島原発で爆発があったことは事実である。日本が大きな危機に直面していることはまぎれもない事実となっていた。」

「携帯に着信音があった。日本からなら通信が可能になったことになる。春木の動悸が高まった。しかし、日本からではなかった。なんと韓国の崔からであった。地震のニュースをテレビでみていて心配になって電話をくれたのだという。崔とは五年前に木藤の別荘の近くのホテルで知り合いになった。このとき、春木は妻と一緒にであった。いつも来ているセブの海を見てもらおうとしてのことだった。朝、ホテルの食堂で食事をしていて。中庭の池が見える場所であった。中央に十数名の韓国人のグループがいた。その中の一人の男性が立ち上がって春木たちの方につかつかと歩み寄ってきた。」

「少しよろしいでしょうか」  
「奥さんとお話させてください」  
「どうぞ。お掛けになってください」

「少しよろしいでしょうか」  
「奥さんとお話させてください」  
「どうぞ。お掛けになってください」

「奥さんとお話させてください」  
「どうぞ。お掛けになってください」

「奥さんとお話させてください」  
「どうぞ。お掛けになってください」

「奥さんとお話させてください」  
「どうぞ。お掛けになってください」

「奥さんとお話させてください」  
「どうぞ。お掛けになってください」

「奥さんとお話させてください」  
「どうぞ。お掛けになってください」

み合つて対立が起きてしまう。民衆の間の友好関係を深め、広げることが世界の平和に大きな寄与をなすことは間違いないと改めて春木は確認した。

帰国へ

デイノから電話があつた。明日のフライトは予定通りであるという。播磨はマニラ経由であるため午前五時の出発便である。三時には起床し、セブ空港に向かわなければならぬ。春木は成田直行便で八時の出発である。五時ごろ空港に向かう。デイノはそれぞれ二人を別々に空港に送る。十分な睡眠は取れない。しかし、春木たちにとつては誠にありがたいことであつた。その夜、春木はなかなか寝付かれなかつた。しかし、いつの間にか寝てしまつたようだった。四時ごろ目が覚めて播磨の部屋をのぞくと、部屋はきれいに片付けられていた。播磨の姿は、もちろんなかつた。

四時五十分、デイノが迎えにきた。階下で管理人のルービーが大声で春木を呼んでいる。準備の整つている春木はすぐに階下に降りた。ジャングルとララミーは、床に敷いた簡易ベッドの上でまだ眠気まなこのままだった。

きて播磨をトイレに引き込みお金を巻き上げたのである。その上、搭乗待合室の手前の最終手荷物、身体検査のコナーでも同様なことがあつた。播磨のバッグに日本円があつたのを見つけた検査官は、巧妙にもその五千円札を「記念に」と要求してきたのである。断ればどんな難癖をつけてくるか分からない。播磨は必要経費と割り切つて渡した。この国の警察、役人たちの中には汚職や袖の下の要求など悪徳の限りを日常としている者が実際に多いのである。フィリピン人の多くが陽気で親切であることと大きく対比をなしている。

搭乗待合室で春木は初めてテレビのワールドニュースを見た。日本の津波の映像が流れていた。春木のこの時の心情に「驚愕」ということがびつたりであつた。広大な湖と化した湖面に浮いている瓦礫や朽ちた家々が、紅蓮の炎と黒を上げて炎上している。津波に洗われて瓦礫の山と化した街。それは写真で見た原爆投下後の広島市の街地や戦後の焼きの原と化した映像とあまりにも酷似していた。また、巨大な津波が一斉に海岸を襲い、さらに住宅街を飲み込み、あつという間にその家々を粉々にして黒い、分厚い水に飲み込んでいる。さらに、逆流した巨大な水の塊がしぶきを上げ、船を押し上げ、押しつ

春木は二人をハグして家の扉を押した。大きな鉄扉の半開きの間からデイノもまた眠そうな顔をのぞかせていた。フィリピン人の朝は早い。五時少し過ぎなのに日本の軽トラを改造した乗り合い車・ジプニーがたくさん行き来している。勤めに行くと思われる人々の往来も多い。五時四十分ごろセブ空港に着いた。いつもであればこの時間帯ではお客は閑散としている。ところがこの日は違つていた。チェックインの入り口から既に人々はあふれかえつていた。ほとんど日本人である。白人やフィリピン人は数えるほどである。成田空港閉鎖が解除され、ここセブ空港にも帰国の人たちがどつと押し寄せたに違いない。春木はバスポートとeチケットのペーパーを確認して発券カウンターに向かつた。預け荷物の重量は二十キロを超えないと思つていたが実際に計るまで心配であつた。成田は二キロぐらいまでは多めに見られるが、ここセブ空港はきわめて厳格である。手荷物も同様である。そして、この空港の検査官や職員の中には悪質な人物も多い。ちよつとした重量の超過などを見つけてはほとんど脅し同然にお金を要求してくる。前回、播磨はこの手にかかつてしまつた。手荷物の重量検査官が一度は見逃したふりをして、実際は搭乗待合室まで追いかけて

ぶし、橋脚にぶつつけ、木っ端微塵にしてさらに勢いを増して次の市街地に覆いかぶさつていく。目を逸らしたののだが逸らせない。春木は息を止めて呆然としていることしかできなかった。搭乗開始が始まつたが、春木は虚ろなまま、身体だけが行動していた。

満席であつた。春木はいつも前方で通路側の座席を求めていた。通路側は取れても前方の席の希望は今までなかなかかなえられなかつた。しかし、満席のこの日、その二つの要望を満たした席であつた。隣の席は八十歳近いのではないかと思われる日本人男性であつた。五泊六日で十七万円のツアーという。結構な値段のツアーに思われた。確かに一流のホテルであつた。英語がほとんど話せず、しかも一人である。ダイビングもしない。どのように四日間を過ごしたのだろうか。春木はいろんなタイプの旅行があるものだと思つて感じた。この老人は、地震や津波のことにもあまり関心がなかつた。結局春木は成田までこの老人とほとんど話さずに過ごした。というより、話す機会がなかつた。彼は直に寝入つてしまつたからだった。春木の逸る気持ちが後押ししたのだろうか、飛行機は追い風もあつて到着予定時間より二十分早く成田に到着した。出口に近い席であつたので早く機外

に出ることができた、必然出国手続きも早く終わった。成田のロビーは意外に閑散としていた。この時期である、遊びで海外旅行をする人は限られている。閑散としているのは当然であると春木は納得した。とりあえず新聞を購入しようと地下のコンビニに向かった。しかし、コンビニにも売店にも一般紙はなく、スポーツ紙しかなかった。一般紙は全て売り切れていた。春木は二紙購入した。二紙ともに津波の威力を見せつける瓦礫と化した風景、巨大な鋼鉄製の漁船がビルの屋上に鎮座しているカラー写真などが掲載してあった。また、福島第一原子力発電所の爆発で破壊された建屋の様子もあった。写真を凝視して春木は再び暗い気持ちに襲われた。日本は本当に大丈夫なのだろうか。「日本沈没」現実になっているのではないかと辛く暗い気持ちになった。春木は娘に無事到着した旨を伝えた。

「良かったです。バスも運行されている様子で何よりです。成田からも気を付けて帰ってください。昨日の夕方、祐樹さんがガソリンを入れに行ったら一箇所は売り切れで、もう一箇所は営業をしてませんでした。ガソリン不足は深刻です。会社も休みになっています。仙台はもつとひどいと思います。おばあちゃんのステイしている杜

の里とは連絡がまだ取れていません。大丈夫なのか心配です。とにかく帰ったらすぐに連絡してください。お父さんと会いたいです」

既に結婚している真紀であったが、やはりこういうときには肉親が恋しくなるのだろう。春木は娘のことを愛おしく思えた。

相模大野行きバスが到着した。成田空港第二ターミナルからの乗客は十人ほどであった。春木はいつものように運転席の真後ろに座った。第一ターミナルからは二十人ほどの乗客であった。バスが高速道路へ入った。窓越しに春の陽光が差し込んでくる。外の風景は明るくまぶしい。東関道を行き交う車の数は少ない。リズムカルな車の振動を聞いているうちに春木はようやく無事に帰国できたことを実感した。テレビの映像や新聞の写真の惨状が信じられない静かで落ち着いた風景が続く。しかし、春木には実家の母の安否確認という最も大切なことが残っていた。

「無事に成田到着できてよかったですね。本当によかったです。実家のお母さんへのお気持ち痛いほど分かります。私もこの二日間いつときもテレビから目が離せません。自宅までの帰路と仙台に行かれるときも十分にお気を付

けてください。今度お会いできるのをとても楽しみにしています」

鹿兒島の尚子からの返信であった。春木は化粧つけない青白い尚子の顔を思い出した。バスはリズムカルな音を立ててなんの渋滞もなく順調に走っていた。バスから見える風景も見慣れたものである。全てが日常そのものに見える。しかし、バスが目的地に着いて降りた先に本当に日常が待ち受けているのであろうか。春木は今起きている現実以外は信じてはいけないように思えた。そのような心構えでなければ気持ち持たないのではないかと思えた。窓からほんのわずかの間見えた建築中のスカイツリーにしても明日は分からない。人間の造ったものは、結局ちりあくたに還るのである。